

第一三三話

市原野狡童為源頼信被虜事

『前太平記』下 卷第二十一 一八頁から二〇頁より

〔群盜の征伐〕

正暦五年の春の三月、伊賀・伊勢・美濃・近江・若狭・越前・紀伊・淡路などの国々から飛脚がやってきて、「過ぎ去った時分から盜賊たちが蜂起して、国司が制

「去んぬる比より群盜蜂起して、 国司の制に

止することもできない。早く御兵を派遣され、御誅戮しませんでしたら、人民の苦

及ばず。 早く御勢を下され、 御誅戮候はずば、 人民の煩ひ

労がこれ以上になってはいけません」と、毎日報告すること絶え間なかったので、

之に過ぐべからず候」

諸卿は話し合っ、て、「在京の武士に命じて征伐しよう」と言っ、て、すぐに將軍の力

量を選定された。その人々は、前任の武蔵国司源満政、左衛門尉_(老) 惟時、前任の

周防国司源頼親、冷泉院判官代_(貳) 源頼信を選出された。頼光朝臣は正暦二年の春

から肥前国守に任命され_(參)、九州にご下向されたために、この人々だけが宣旨を

受け、それぞれの国に出発する。その中でも源頼信朝臣のお供には、加藤豊後次郎

忠正、大宅太郎光国、坂戸九郎兼則、後藤三郎則経、加藤大夫親孝、首藤五郎公清を始めとして、其軍勢合わせて二千騎余りが若狭・越前を転々とし、あちこちの悪党たちを残ることなく誅戮して、前後二十日を過ぎないうちに全て平定し、すぐに

前後二十日を過ぎざるに悉く静謐し、

軍を引き上げたので、三月二十七日には東坂本^(肆)に到着なさる。

【鬼同丸生け捕らる】

ここから諸軍勢、並びに生け捕りにした者は、すぐに京都に上洛させ、御家人たち二百人余りをお連れして、その夜は日吉神社^(伍)に参籠して、翌日は根本中堂^(陸)、大講堂^(漆)、その他の堂を巡って、西坂本^(捌)に下り、次はお祈りの用事が

今度丹祈の旨あるに依って、

あるために、賀茂^(玖)・貴布禰^(拾)の両社に参籠して、同月の三十日に、下向の道に向かい、市原野^(拾壹)に（本陣の）帷幕^(拾貳)を張らせ、乾飯^(拾参)をお食べになったところ、お供でおりました大宅太郎光国が申し上げたのは、「ああ、そうそう、

「実や、

人が申し上げますことには、ここから北西に当たるところに一つの岩窟がある。そ

人の申し候は。

是より乾に当たって、一つの岩窟あり。

ここに鬼同丸というずる賢い童が住んでいる。その前は比叡山にいて、大師坊といっ

※※※訳の引用・スクリーンショットなどは、作品名及び本サイトのURL（月下庵/<https://gekkaanzentaiheiki.wixsite.com/mysite>）をご記載いただけましたらご自由にさせていただいて結構です。※※※

彼処に鬼同丸と云ふ狡童住めり。

其先、比叡山在りて、 大師坊と云へる

た人の（元の）稚児であったが、天狗の世界の術を学び、その上力は人より勝り、

人の見なりしが、

天狗道の術を学び、

而も力人に勝れ、

山の上や下の稚児・法師をわがままで殺害し、経論を焼いて捨て、僧坊 (拾肆) を打

山上山下の見法師、

我意に任せて殺害し、

経論を焼き棄て

僧坊を打ち破り、

ち壊し、大寺の仏法を破滅させようと計画したところにととう山を追い出され、

一山の仏法を破滅せんと企てける程に、遂に山を追ひ出だされ、

その岩窟を構え、その中に正方形で一丈ほどの石があり、その上に座って、常に

彼岩窟を構へ、

其中に方一丈計りの石あり、

其上に坐して、

常に

山々の大天狗や小天狗を誘い込み、昼夜仏法破滅の計画をするため、そのままにし

山々の大天狗小天狗を語りひ、

昼夜仏法破滅の謀をなす由、

其儘

ておられますならば、大変な大事件であるはずです。幸いここからほど近くですの

闇かれ候はゞ

勇々しき大事なるべきにて候。

幸い是より程近く候へば、

で、その岩窟を一見ご覧のためにおいでになって、あの曲者が現れたならば、すぐ

彼岩窟御一見の為ながら御出あつて、

彼癖者現れなば、

即ち

に退治すべきである。このことをどのようにお思いになりますか」と、あれこれ挨

退治あるべきなり。

此事如何思し食し候」とて、

左右に揖して

拶して申し上げたところ、大将を始め同席の人々は、「このことは確かにふさわし

申しければ、

い。朝廷のため、一族のため、急いで退治しよう」と言って、例の岩窟に向かわれたのだった。

鬼同丸は早くもこのことを聞いて、その石にまたがって立ち、一人ずつ全てを押しつぶそうと待ち受けた。光国が先頭になって馬を進め、大声を上げて、「どうした鬼同丸。お前はここにいて、仏の教えの邪魔をし人民を苦しめる（という）話、その噂があるために、誅戮のために源頼信朝臣がただいまここにお向かいになる。急いで出てきてお目にかかれよ」と呼びかけて、向こうをきっと睨んだところ、その背丈は七尺ほどの大童子が石の上から飛び降りて、雷が落ちるかのように大宅を目掛けて走り向かう。光国は馬を乗り捨て、同じようにして組みあおうとする。ずる賢い童は物ともせず、驚掴んで投げようとするが、（光国は）投げられまいと揉み合った。加藤・後藤・坂戸・首藤は一度にばっと駆け寄り、前後左右からしがみつくが、（鬼同丸は彼らを）掴んで避けようとしたところに、半時（拾伍）ほど戦い、とうとう押さえこまれて捕まった。こうして岩窟の中を回り、もしかしたら仲間がいるだろうかと探したが、怪しい者もいなかった。

すぐにあのずる賢い童を前に立たせて、都にお帰りになったところ、洛中の貴賤の人々があちこちに噂して、あちこちに立ちながら集まり、「本当に源氏の人々

は、どんな仏神の化身でいらっしゃるのか。代々武力の威光を高く振るい、このような滅多にない癖者を簡単に退治なさるのだなあ。もしこの一族がいなかったなら

若し此一家なかりせば、

ば、世の中はこのようにあるだろうかと思うが、この一族の勝利の徳によって、人

世は斯うこそ有るらん、

此一家の武徳に依り、

民は全て安心させる」と、感じないという者はいない。ここから始めて、（頼信

民皆安堵の思ひをなす」

の) 武功は日々多くなり、戦の功績はその都度現れ、素晴らしい武将となられる。

注釈

※壺・左衛門尉……宮中の諸門の警護に当たった役所の三等官。

※式・冷泉院判官代……冷泉院は京都二条にあった上皇の御所。判官代は上皇や女院に関する事務をとる役所の事務官。

※参・頼光朝臣は正暦二年の春から肥前国守に任命され……第一三五話参照。

※肆・東坂本……比叡山の東山麓一帯。

※伍・日吉神社……滋賀県大津市坂本の日吉大社。

※陸・根本中堂……比叡山延暦寺の中心になる堂。

※漆・大講堂……比叡山延暦寺の殿堂の一つ。

※捌・西坂本……比叡山の西山麓一帯。

※玖・賀茂……賀茂神社のことと思われる。京都市北区上賀茂本山町の賀茂別雷神社（上賀茂神社）と賀茂御祖神社（下賀茂神社）の総称。

※拾・貴布禰……京都市左京区の貴船神社のことと思われる。

※拾壺・市原野……京都市左京区中西部の地名。

※拾貳・帷幕……垂絹（垂れ下げて仕切りとして使う布帛）と引き幕（左右に引いて開閉する幕）で、陣営に張るもの。

※拾参・乾飯……干して乾燥させた飯。

※拾肆・僧坊……寺院の僧や尼が住む建物。

※拾伍・半時……約一時間。

感想・指摘・叱咤激励、随時受け付けております。Twitter やメール等でご連絡ください m()m

公開：2021/6/2
海熊童子